

ずぶ濡れのハト

南出謙吾

【舞台設定】

とある山あいの、人口五千人に満たない小さな町。その老舗スーパーマーケット、マルエイ鳥越店。

舞台は、バックヤードの休憩コーナー。

舞台奥方面にベンチ。手前にテーブル一脚と椅子が数脚。

舞台正面は搬入用のシャッターになっている。

シャッターを開けると、搬入用のトラックを停めるスペースがあり、その向こうには、広い河原。上流の割には広く、広い割には流れは速い。

川原の向こうには深い山々が連なる。従業員自慢の景色だ。

シャッターを含め、駐車場および川原は、客席側にあり、舞台としてはセットしない想定。

【人物】

小柳 男 三十代後半 マルエイ鳥越店の新米店長
猪原 女 四十代前半 惣菜部チーフ
久保 女 三十代半ば 惣菜担当
八木 女 二十代半ば 惣菜担当
増田 男 三十前後 鮮魚部サブチーフ
坪井 男 五十代半ば 精肉部チーフ
絹川 女 二十代前半 レジ担当
佐野 男 四十代半ば 出入りの運搬会社

【本編】

一場 真夏

・早朝 五時

川のせせらぎが聞こえる。

せせらぎが小さくなり明かりが入る。

スーパーマルエイのバックヤードの休憩コーナー。

扇風機が首を振りながら回っている。

ベンチに女（猪原）が、ツタンカーメンの様な格好で眠っている。

スラックスにジャンパーを羽織った男（小柳）が入ってくる。電気を点ける。手には真新しい新聞。

猪原が眠っていることにぎよっとする。ほんの一寸考える。扇風機を止め、近くの椅子に座り、新聞を広げる。中ほどの地方版までペラペラとめくる、一つの記事をじっくり読んでいる。

猪原、目を覚ます。体だけ起こす。

猪原 あ、ごめん。

小柳 なに寝とん。

猪原 車できたさけ。飲むつもりなくて。

小柳 風邪ひくやろ。

猪原 なにい。

小柳 扇風機つけたまま寝たら。

止まっている扇風機を見る。そして時計を。

猪原 ……五時。

小柳 うん。

小柳、新聞を折り曲げ、記事に集中する。

猪原 高(た)こつくし。

小柳 ん。

猪原 代行呼ぶと。

小柳 あ、やな。

猪原、座る。

猪原 店長。

小柳 ん。

猪原 早ない。

小柳 ちよつとな。

猪原 大変ですなあ。

小柳 うん。

猪原 自分でゆつとるし。

小柳、対応が面倒になってしまい返事をしない。
猪原、大きなあくび。

猪原 ま、いいわ。朝ごはんまでに戻ったら。

小柳 うち、大丈夫なん？頼隆君。

猪原 おばあちゃんっ子やさけ。おばあちゃんおっいたらいいげんてあの子は。

小柳 そんなもんなん。

猪原 かわいがない。

小柳、母親らしからぬ発言が少し気になるが、取りあえず軽くだけ頷く。

新聞に集中する。

猪原 (ちよつと笑って) 全力すぎやろ。新聞読むの。

といいながら、猪原、小柳の隣へ。

小柳が読んでいる記事を読む。

猪原 ・・あ。決まってもたん。

小柳 昨日本店からメールあって。今日の朝刊に載るって。

猪原 鶴来(つるぎ)に超大型ショッピングセンター。来年夏オープン。・・・え、ユニクロ入るん。

小柳 ケーズデンキも。

猪原 すごい便利になるやん。バイパスできたら15分位かからんぞいね。

小柳 うん。

猪原 (笑って)これ、やっばいね、うちの店。

小柳 うれしいん。

猪原 笑うしかないやろ。

小柳 ここまでする？ふつう。

猪原 もう白旗け。

小柳 まさか。これからや。

猪原 頼むぞいね。

小柳 ただな、反対署名とか、振興会のこととか。ボランティアでやってくれとったやる。今日みんな出てくるとき、新聞見た人おれんなあつて思たら居たたまれんよ。朝礼なんてゆお。

猪原 それ考えに来たん。こんな早に（はやあに）。

小柳 まあ。

猪原 涙もんやん。みんなわかってくれるぞいね。

小柳 猪原さんに励まされとんのもどうかと思うわ。

猪原 店長まだ一年おらんやん。うち十年おれんよ（いるのよ）。うちのがわかつとる。この店のいいところ。

猪原 それに、なんとゆっても惣菜はうちが見とれんさけ大丈夫や。びっくりカ ツ井超える商品考えたげるがいね。

話の途中、男（坪井）、入ってくる。

二人が居ることに強い違和感を感じながら慎重に。

坪井 あの、おはようございます。

小柳 え、あ、おはようございます。もう出勤ですか。

坪井 はい。

小柳 いや、早すぎません。

坪井 昨日、計算まちごとるって、店長が。

小柳 え、あでも、こんな早に来てまでやらんでも。

坪井 お昼の会議までに、修正しておくようにって。

小柳 だからお昼までいいですよ。

坪井 開店すると、全く時間ないですさけ。

小柳 あ、そうですか。なんか、すんません。

坪井 まちごうたん私です。すんません。

坪井、去る。

猪原、立ち上がり坪井が去ったのを見届ける。

小柳の向かいに座る。

猪原 何まちごうたん。

小柳 仕入れの見込み。ほんと苦手なんや、坪井さん。計算。

猪原 しゃあないやろ。チーフあがったばっかやん。

小柳 もはやそうでもないよ。

猪原 五十五やっけ？

小柳 そんならい。

猪原 ようやくチーフ昇格か。

小柳 二十五年目やし。

猪原 やるせないねえ。

小柳 精肉の売上落ちとるし。

猪原 やなあ。

小柳 精肉の経費増えとるし。

猪原 ほんとけ。

小柳 シャッター開けていい？

猪原 いいけど。

小柳 空気吸いたい。

小柳、立ち上がりシャッターのボタンを押しに行く。
シャッターゆっくり開く。淡い光が差し込む。
穏やかな鳩の鳴き声。

猪原 雨、降っとる？

小柳 どやろ。でも道路濡れとる。

湿った風が入ってくる。川のせせらぎも。

小柳、猪原が眠っていたベンチに座る。

浅く腰かけ、両手を広げて体を支える。

猪原、その隣へ。小柳と同じ感じで座る。

二人の、指先が触れかける距離だ。

小柳、その距離と、坪井を気にする。

二人の前には、搬入用の僅かな駐車スペース、川辺の草むら、その先
ややあって、流れの速い広い川。

マルエイの従業員お気に入り景色だ。

風と景色とせせらぎ、朝の匂いに浸る。

猪原 スープの冷めん距離にな。

小柳 ん。

猪原 住んどれん。前の旦那。

小柳 へえ。

猪原 スープの冷めん距離に家こうたさけ。

小柳 ん。ああ。

猪原 うち、お母さん独りやし。

小柳 うん。

猪原 そんで……。

小柳 ……なに。

猪原 前の旦那が。時々くれ（来る）ん。頼隆に会いに。

小柳 ……。

猪原 小柳君には、言（ゆ）ってなかってんけど。頻繁にくれん。

小柳、深く腰掛けなおす。触れていた手を、膝の上に。その手を組む。

猪原、立ち上がる。

猪原 ほんとのことやさけ。仕方ない。やっと言ったんや。

猪原、去る。

川のせせらぎ徐々に大きくなり、雨音に変わる。やがて豪雨に。

・朝 九時半

小柳、奮起して立ち上がる。大きな雨音に負けない声で。

小柳 おはようございます。皆さん、もう知つとりますよね。まずは、出店阻止に向けた惜しみないご協力、本当にありがとうございます。（深く、頭を下げる。）残念ながらうちの、商店街の、鳥越の町民の切実な声は、全く届きませんでした。痛恨の極みです。開店三十周年の節目だというのに皮肉なもんです。隣町とはいえ、バイパスが完成したら十五分。マルエイ鳥越店は、おそらく壊滅的な打撃を・・・もつとゆうと存続の危機ですそれでも・・・この店は鳥越の唯一のスーパーなんです。

話の途中で、ひとり、またひとりと現れる。小柳の話の聞いている。

小柳 町民の台所としてなくてはならん存在です。運命共同体とも言える商店街のにぎわいの拠点としても、なくてはならん存在です。そやからこそ、これまで以上に一枚岩となって立ち向かっていかんなん。どうか力を貸してください。皆さん一人一人が、知恵を絞って力を合わせれば、必ず突破できると信じてます。各部チーフは、十五時から緊急の対策会議を開きます。では、今日も一日、よろしくお願いします！エイエイオー！

皆 エイエイオー！

各々、テキパキと持ち場につくべく、去る。

・夕方 十八時

雨は止んでいる。

山あい独特の落ち着いた蝉の鳴き声。

八木と久保入って来て、テーブルを挟んで激論を交わす。

八木 で、売れます？それ。